立命館大学

日本文学会 ニュース No.43

「論究日本文学」第70号　付　録　1999.5

日文研究室だより

一九九八年度

会長　彦坂佳宣

近年、世の中の動きが急にあわただしくなってきました。大学にもその波がおよび、どれから数え上げていいのか迷うくらいの変化が起きています。

つい最近、授業シラバスが導入されたかと思ったら、授業評価アンケートも導入・実施され、大学では情報化・国際化が叫ばれ、学生の「学びの実感」を高め「みづから発信する能力」をつけること等々が求められています。

文学部内では、今までの専攻制を内的に改革して、新しい構想をたてることも懸案になっています。教員の中には「今までの一九世紀的学問体系はすでに硬直して現実に合わないものになっている」という発言もありました。そうなのかとは思うものの、ではどうすれば良いのか、先の見通しの立てられないところが悩みです。文学と歴史を合体させる、文学科を総合化させる…等々のことが言われていて、具体案は出ないものの、一二年の内にそれをしなくてはいけない状況です。

日本文学専攻でも、こうした動きをうけて、内部から改革をしようという機運が出てきました。今までは個々の教員が特定の時代とジャンルを担当するという構成であったものを少し変えて、創作や鑑賞的な面も視野に入れる、紙に書かれた資料以外のものも研究対象とする、既成の日本文学の枠を何らかの形で拡張する、各種の情報機器を使って資料やデータを検索・収集し視野をひろげる方策をめざす、実習・体験的な学習経験を増やす…などまだ具体化できず案とも言えない案が出ています（この中には私のとっさの思いつきも入っています）。

しかし、また今までの重要な分野である文献学や書誌的研究、地道な作品・作家研究の方法も堅持する。それを、今までの方法では離れていきがちな学生にも身近なものとして提示し、ともに学んでいくことも必要でしょう。教員の資質も問われることになります。

研究上の模索はいつの時代にもあったでしょうが、特に近年はこうした模索が続くことになるでしょう。日本文学会でも、各パートの諸活動を通じて、研究の内実を深めるとともにそのあり方の評価が必要になると思います。教育・研究面での日文研究室と日本文学会との接近、卒業生および在学生をとりこんだ活動が今まで以上に求められると思います。